

○此發菩提心、多くは南閻浮の人身に発心す(第二十六節)

べきなり、今是の如くの因縁あり、願生此娑婆(第二十七節)

国土し来れり、見釈迦牟尼仏を喜ばざらんや。

○静かに憶うべし、正法世に流布せざらん時(第二十八節)

は、身命を正法の為に抛捨せんことを願うとも値うべからず、正法に逢う今日の吾等を願

うべし、見ずや、仏の言わく、無上菩提を演説

する師に値わんには、種姓を觀すること莫れ、

容顔を見ること莫れ、非を嫌うこと莫れ、行

いを考うること莫れ、但般若を尊重するが故

に、日日二時に禮拜し、恭敬して、更に患悩の

心を生ぜしむること莫れと。今の見仏聞法は(第二十八節)

仏祖面々の行持より来れる慈恩なり、仏祖若

し単伝せずば、奈何にしてか今日に至らん、

一句の恩尚お報謝すべし、一法の恩尚お報謝す

べし、況や正法眼蔵無上大法の大恩これを報

謝せざらんや、病雀尚お恩を忘れず三府の環

能く報謝あり、窮亀尚お恩を忘れず、余不の

印能く報謝あり。畜類尚お恩を報ず、人類争

か恩を知らざらん。其報謝は余外の法は中る

べからず、唯当に日日の行持、其報謝の正道

なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑

にせず、私に費さざらんと行持するなり。

光陰は矢よりも迅かなり、身命は露よりも脆

し、何れの善巧方便ありてか過ぎにし一日

を復び還し得たる、徒らに百歳生けらんは恨

むべき日月なり、悲むべき形骸なり、設い百

歳の日月は声色の奴婢と馳走すとも、其中一

日の行持を行取せば一生の百歳を行取するの